

するべきだと考えているが、この見極めが難しい。私たちが被災地に支援に行くことは、ネパールに行くことと同じだと感じている。例えば、現地の人々のために日本の便利なものをたくさん持って行ったとしても、壊れたらまた持って行くということを永遠に続けるのは、不可能である。そうした支援の形ではなく、私たちが行かなくても、現地の人たちの生活の中で回せるもの、地元の人々だけで何とかできるようになる支援の仕方やシステムが必要だと思う。地元の人たちが自立して地域を作っていくためには、他県の団体がいつまでも支援を続けることは得策ではない。これまで支援を行ってきた団体が活動の形をシフトするべきタイミングの見極めが難しく、それが大きな課題であると感じている。

青年海外協力隊としてコスタリカで活動した経験を活かし、被災地スタディーツアーを行ないたい。コスタリカはエコツーリズム発祥の地である。公園などの環境を整備し、観光客と地元の人々の利用料金に差をつけ、利益は地元環境整備へ還元するエコツーリズムの仕組みが被災地でも活かせる

と考えている。すでにボランティア要請のない地域に無理にボランティアをしに訪れるのではなく、町を眺め、買い物をするだけでも良い。ツアー参加者は被災地を訪れることで、多くの学びがあり、地元の人たちとの交流も生まれていくだろう。

## 大震災を振り返って

自然を相手に私たちができることは何もないのだと感じた。私たちはいつの間にか便利なハイテクノロジーの世界に入ってしまった。「環境」をテーマに考えていく団体として、便利な世界の中でいかにエネルギーを使わずに生活するかを考えてきたが、震災などの緊急事態の時に本当に強いのは、昔の人たちの知恵や人と人のつながりなのだ気づいた。メーリングリストに入っていることやFacebookで友達になっていることが重要なのではない。支援活動を長く続けてこられたのは、誠意をもって活動したことで、被災地の人々と“心”でつながることができたからであると思う。

NPO

## お互い様。 支援活動は地元の方々が動き出すきっかけに。

秋田市

船山 仁 NPO 法人秋田パドラーズ

取材日 2012.6.20

カヌー愛好家が集まり、自然と共生することの大切さ、先人の知恵、自然環境保護について多くの人々に伝えるため2003年、NPO法人秋田パドラーズを設立。美容師という本業を持ちながら、東日本大震災直後より被災地に入り、美容師ボランティアや炊き出し、住民と協働で瓦礫撤去、側溝清掃などの復旧復興支援を行なった。

### 3月11日 14時46分

職場で仕事をしている時だった。長い揺れが続いた。部屋の中で物が倒れるような被害はなかったが、10～20分後に停電した。市内は停電で信号機が機能せず、渋滞が起きていたので、帰りに帰れない人たちがパニックになっていた。たまたま前日に、団体で使用するための発電機を用意していたので、テレビを見ることができた。津波の映像やアナウンサーの混乱した異常な様子から、戦争が起きているのではないかと感じた。電気は12日の夕方に復旧し、他のライフラインは通常通りだったが、ガソリンが給油できずバスも動いていない状態だった。スーパーマーケットの棚からは日持ちがする常備食が消え、何も並ばない状況が3日は続いた。今から考えると通常の生活に

戻ったのは、1ヶ月が過ぎてからのことだった。

### 被災地の混乱

パドラーズ会員、スタッフの親類や友人が被災し、各自が支援物資を持って被災地に入った。被災地に入ったスタッフからは、パドラーズとして支援活動をすべきではないかという意見が寄せられた。被災地では避難所の状況把握もできない状態で、県外からボランティアを受け入れるどころではないという。行政の支援だけではどうにもならない現状ならば、我々パドラーズにできる事があると考え、支援に乗り出すことになった。3月20日、現地へ支援に入る前に理事3人を被災地に送り込み、改めて情報収集を行なった。最初に調査したのは支援要請があるか・ないかだ。次に、泊

まるところが確保できるか、水を手に入れるか。こうした条件がそろっていた場所が気仙沼の南郷地区であった。

200世帯ほどが集まる南郷地区では、避難所に行かず自宅に留まっていた家庭が10世帯ほどあった。少し高台にある45号線付近は被災を逃れていたが、店舗があっても商品が何もない。避難所に来ない人たちは自立しているとみなされていたが、実際には物がなく日々の生活に困窮しており、我々はそこに支援の必要性を感じた。

現場はとにかく混乱していて、せっかく送られてきた食料が腐ってしまい、最初に来たボランティアの仕事は腐った食料を捨てることから始まったとも聞いている。全国から多くの物が送られてきたが、現地で処理ができず大きなミスマッチが起きていた。それは仙台も例外ではなく、若林区ではご飯を食べていない子どもたちがたくさんいた。我々が持って行ったおにぎりを美味しそうに食べていた姿を覚えている。かつてない規模の大震災の発生で行政も混乱の極みにあり、3日間ぐらいは自分の力で食いつなぐ必要性があると感じた。また、地域にいるリーダー次第で支援を受けるレベルに差が生じていた。私が行った時は60代から70代の方がとても頑張っていた。日本に物が無い時代を経験した世代は対応力がある。物が無ければ別のもので代用する機転や応用力があり、若い人たちにいろいろな事を教えている姿を目にした。

## 被災住宅を拠点に

南郷地区で、被災した住宅の2階を住居として提供してもらい、支援活動がスタートした。私が初めて被災地に入ったのは3月29日だったが、冷凍工場から流れてきた秋刀魚などが瓦礫に交じって散乱しており、鼻をつく臭いが印象的だった。最初に気仙沼市を流れる大川を見た時、ここでカヌーができればいいと思った。しかし南郷地区は津波被害が深刻で、川のクリーンアップの前に住宅地の瓦礫を片づける必要があった。

ボランティアセンターでも瓦礫撤去の支援をしていたが、完璧ではなく再度パドラーズに支援要請が来た。道路に瓦礫が散乱していたが、それ以上に家屋の中の瓦礫の量が多かった。どこの家に行ってもとんでもない量の瓦礫が屋内に入り込んでいた。この瓦礫を運び出すことが大変な作業で、やっとの思いで瓦礫を運び出した後にはこれまた凄い量の泥が姿を現した。瓦礫の中には持ち主の思い入れのある物がたくさんあり、第三者の手によって分別やクリーニングが行われた事は、作業をスムーズにしたと思う。

5月上旬からNPO法人北上川サポートセンター



と協働で、気仙沼市を流れる大川のクリーンアップをはじめた。市が業者に委託して重機で瓦礫撤去を行なう予定であったが、少しでも早く、少しの面積でもとの思いから活動をスタートさせた。作業に取りかかると、思った以上の瓦礫があり、中からは写真や年賀状、5円玉、数珠、印鑑、財布なども見つかり警察に届けた。重機で撤去されていたら見つからなかっただろう。クリーンアップを進めていくと、活動を見ていた地域の方々にも参加の輪が広がっていった。地域の公共的な部分にNPOが率先して関わったことが、「自分たちの地域は自分たちで復興させよう」と地域の人たちに思わせる結果へつながったと感じている。結果的には、テニスコートの3倍程の広さをきれいにした。川は心が癒される場所でもあり、多くの人々に影響を与えられたと感じている。

## 南郷泥アゲ大作戦

6月にみんなで酒を飲んだ時、「側溝が気になる」という話が耳に入った。自分の家の側溝をきれいにしても水が流れず、雨が降った時は水があふれるという。原因は別の側溝にいろいろな物が詰まっていることだ。一部だけ清掃しても意味がなく、広い範囲を大規模にきれいにする必要があった。そこで「南郷泥アゲ大作戦」を企画した。地域の方々が積極的に動き、行政やボランティアセンターに呼びかけて土嚢を1000袋、ボランティアを100人集めてくれた。秋田からの参加者を含めて総数300人も人が集まった。本部の指揮は南郷地区の方、側溝の泥あげは各団体ボランティア、フタの上げ下げをパドラーズといった具合に細かく8班に分かれた。優先順位を決め、処理したところは町内地図にバツ印を付けて確認した。ヘドロと悪臭と戦いながらの作業で、土嚢に入られたヘドロは回収班がトラックで回収していくが、水分を含んだ土嚢は重く大変な苦労であった。1000袋もの土嚢の山ができたが、この土嚢は地

盤沈下の見られる地域で再利用されたと聞いている。

この「南郷泥アゲ大作戦」では地域の方々が率先して動いてくれた。支援に頼るばかりではなく、地域のために自分達が動かなければという気持ちが生まれていたのだと思う。南郷地区にはもともと婦人部がなかったが、このことをきっかけに数人の女性が集まって婦人部ができた。ボランティアの人たちの食事作りやトイレの手配など、活動を支える体制もできて、地域が自治体として動き出す第一歩となった。

最初はパドラーズとして自分たちができる事をやろうと、瓦礫撤去などの復旧活動に取り組んでいたが、いつの間にか地域の方々と協働で作業を行なうようになり、最終的には南郷地区の方々が中心になって協働復旧作業を行っていた。毎週被災地に入り地域の方々と顔を合わせる事で「お、今日も来たのか！上がってお茶っこ飲んで！今日市役所から来たパン食ってみれ。」と声をかけてもらえるようになった。こうした触れ合いはもちろん、自分の家や公共の場がボランティアの手によってみるみるきれいになっていく変化を目の当たりにして、地域のために奮闘するボランティアへの信頼に、ひいては地域の方々と協働の復旧作業へ繋がったと感じている。

## 課題は雇用と温度差

今の一番の課題は、被災地の雇用の問題だ。働く環境が整えば町は自然とできてくる。自分で稼ぐことが、復興への一番の近道だ。しかし、被災地には仕事がないために多くの若い人たちが地域を離れている。気仙沼で一緒に活動した若者も皆、仕事を求めて地域を離れてしまった。今年の3月までは失業手当があったが、受給期間の終了がさらに拍車をかけた。もともと人が少ない地域でさらに住民が離れば、物を売ってもなかなか売れない。この状況を打破するために、「復興応援団」を企画した。秋田からバスで被災地に入り、被災地域で買い物をする。秋田の人たちには、被災地に行きたいけれど物見有山で行くわけにはいかないという思いがあり、被災地の人たちはこの現状を見てほしいし、お金を使ってほしいと思っている。第三者が被災地に行き、現場を直接見て少額でもお金を使うことで、地域は少しでも元気になる。この取り組みは被災地の方から感謝されている。この企画と一緒に、仮設住宅を回ってのお茶っこクラブも進めている。

もう1つ、被災地と秋田の温度差を課題として感

じている。被災地の子どもたちは東日本大震災で、友達が目の前で流されていく光景を目の当たりにしている子どもも多く、悲惨な経験から自分が生きる意味を強く学んでいる。私は秋田市内の学校から依頼を受けて震災の講演をすることがあるが、子どもたちと話をすると被災地の子どもたちと比べて考え方の大きな違いを痛感する。被災地から生きる意味をもっと学ぶべきだと感じ、秋田の子どもたちを被災地に連れて行く取り組みもしている。被災地の方に秋田に来て寛いでもらうことも重要だが、秋田から被災地に入り人間が生きる意味を真剣に考える事も大切であると感じている。あの震災は、我々に生きていく上での多くの学びを与えたのだから。

「船山さんはなぜ被災地に行くの？」とよく聞かれる。確かに私は美容師という本業を持ちながら、これまで60回ほど被災地に入っている。準備を含めると倍の日数は要している。被災地では阪神淡路大震災で被災した人たちもボランティアとして駆けつけ、誰もが泥まみれになりながら頑張っている。根底には、困った時に助け合う「お互い様」という気持ちがある。これは、行ってみたいとわからない気持ちかもしれない。

## 振り返って思うこと

当たり前の事が当たり前でなくなった時に、それらがどれほど重要であったかに気づく。何気ない生活が一番大切だと切に思う。家族や絆など、失ってみてはじめて必要だと感じる事がたくさんあった。人の痛みや苦しみなどつらい現実を見たけれど、震災から1年が経って今、大きな学びがあったと感じている。



撮影：2011.4.1 泥出しのボランティアの皆さん